

九世紀渡唐僧日記考

I

目加田さくを

日本叙述文芸史は九世紀に入つて、めざましい作品群の出現——もとよりそれは漢文体による叙述文芸であつて、仮名文体によるそれではない——をみる事となつた。それらは、おおまかにいつて、記類と伝類とにわかれたる様である。小論でここに採りあげるのは、その記類中の(I)類、日記、紀行である。この(I)類の源流は、すでに七世紀において本邦叙述文芸の嚆矢となつた (附記参照) 伊吉連

博得書、難波吉士男人書(安斗宿禰智徳日記、調連淡海日記、和迹部臣君手手記)をそれと認める事が出来るのである。続く八世紀の吉備真備在唐記等、渡唐日記の系流に属するところの入唐求法僧等の日記がここに存する。これが前世紀の渡唐日記と異なるところは、請益僧、留学僧、即ち仏徒の手になる日記、紀行であり、その点、八世紀の唐大和上東征伝、さらには将来の大唐西域記に通ずる性格を有するものである事であろう。この類に、克明にして真に迫る、すぐれた表現力を有する作品が出現した。これをここでは採りあげて考察してゆこうとする次第である。因に、同じく記類の(II)類として漢唐の冥報記、般若験記、搜神記、斎諧記等々、所謂、記類の影響をそのまま受けとめて、薬師寺僧景戒は日本国現報善惡靈異記を、元興寺沙門義昭は日本感靈録という

靈驗怪奇説話集を形成しあげた。伝類の方面では既に八世紀において、伝記が普及していたが、伝記に名を残す程の人物は大政治家か高僧であるところから、将来仏典中に含まれた天竺震旦の高僧伝の影響と相俟つて爾来、高僧伝、靈驗記の系流が有力となつてゆくのである。この伝類に、唐代伝奇にならつて、七世紀末より八世紀初頭にわたり我が漢文芸作家圈の手になる伝奇類の試作が行われていたろう事については、拙稿 (註1)「伊予部連馬養作浦島子伝(仮称)考」ならびに「柘枝伝考」 (註2)において既に論じたところである。

註(1) 言語と文芸 昭和三五年十一月号
註(2) 語文研究 三十六輯

附記

伊吉連博得書について

伊吉連博得書は、今日となつては、孝徳紀白雉五年二月遣大唐押使高向玄理卒 一 於大唐 二 の条、斉明紀五年七月遣 一 小錦下坂合部連石布、大仙下津守連吉祥 一 使 二 於唐国 一 仍以 二 陸道奥蝦夷男女二人 一 示 二 唐天子 一、の条、同六年七月百濟滅亡の時期に、同七年五月耽羅始遣 二 王子阿波伎等 一 貢獻、の条下に割註として引用する所によつて窺い知る外はないが、先ず、以下本文傍線

(A)の記事によると、「客之中」にいた伊吉連博徳の言い開きによつて、事なきを得たのであるから、彼はかなり唐朝との外交にもの馴れた者であつたに相違ない。伊吉連は新撰姓氏録によれば、左京諸蕃に属し、その出自は長安人劉家揚(揚)雍にありとされる帰化人で、六六七年天智六年には送唐使節となり、後年大宝律令撰定に参与した。すれば、白雉五年の記事も、彼が日本にあつて遣唐留學生の記事を誌したのではなく、斉明紀が所謂、「使人」、「倭客」の名を詳細に列挙しないにもかかわらず、斉明五年の倭客中に伊吉連博徳がいて、大いに活躍したのであるから、孝徳紀も使人の名を詳記しないが、彼の著名な高向玄理を大使河辺麻呂、副使薬師恵日の上に遣大唐押使として任命した大規模な孝徳帝白雉五年の遣唐使船にも同乗したものと想われる。「有^二伊吉連博徳^一奏^レ因^レ免^レ罪^一」^一 斉明紀五年という語学力を以て、恐らくは訳語の職掌か何かで、実際には記録、渉外、通訳、庶務等諸種の業務に従事していた、その為此こそ彼の記録に存する学問僧恵妙等の^レ唐死、智聡等の^レ海死、定恵^一以^二乙丑年^一・付^二劉徳高等船^一帰、等々具象的な記事が、重要かつ信憑性にとむ資料として、正史に註記されるにいたつたものであらうと想定する次第である。

従つて、本文傍線の部に注目すれば、伊吉連博徳書なるものは、少くとも、白雉五年より斉明元年にかけての遣唐使船往來の間、及び、斉明五年秋七月三日、難波、三津ノ浦を出帆してより同七年五月二十三日朝倉之朝に復命する迄の期間、の日記、紀行であつたと想像されるのである。天智紀六年十一月唐使司馬法聡等帰国に際し、「以^二小山下伊吉連博徳・大乙下笠

臣諸石^一為^二送使^一・同七年春正月送使博徳等服命」の記事によれば恐らく百濟まで送つたにすぎまいと思われるが、送使となつた名譽を多とし、彼は又日記を認めたであろうが、それは伝らない上に年数の隔りがあるので一応別個のものとして考えておく。

此の日記とは、日次記たる事を原則とはするが、恐らく凡てが厳密な意味での日記ではなく、傍線(a)の部分の如く、日次記の部分もあれば、事件があつた日のみ、その進行を逐つて認める部分もある、といった体裁の作品であり、此の紀行とは、原本も恐らく書紀所引の部分と大差なく、筑紫ノ大津ノ浦より百濟南畔之島、次は何処、と、簡単な地理、風物、氣候、航行の状態を記し留めるにすぎないものであつたらう。しかしながら、博徳書の本領とするところ、刮目して読みとらなければならぬ所は、実は唐天子謁見以後の記事なのであつて、ここには重要な記述、表現技巧が存在している。それは一見、倭客が唐都滞在中受けた待遇、蒙つた被害という形で淡々と叙されている。

当時唐朝の征韓政策が急であつたため対日政策上機微にふれる唐天子の質問、冷遇、さらには韓土出兵の機密漏洩を恐れて日本使人行が帰国の足止めに遭うのみか、監禁された事件、韓智興等の讒言によつて、あわや流罪に処せられようとした事件等が、日本内地にあっては到底聞知しえない複雑な立場、即ち、日本絶対の立場でなく、唐に來朝する諸蕃の^一にすぎない日本国の一「使人」の立場から、その諸蕃中最も優れているという自負と、來朝しながらも本国は、当の唐朝と朝鮮半島を挟んで対

峙している緊迫した情勢下にあつて、その「書」が唐の官憲に差押えられた場合、他意ない如く、実にさしさわりなく叙していく巧さ、唐の天子が日本国内の情勢如何、蝦夷と日本との關係を知ろうとして、根掘り葉掘り下問する底意を知つて、かくかくの件について訊ねられた、と事実だけを克明冷徹に記述する、即ち、智興らの件で流罪に処しようとして、それが言い開きによって断罪出来ないとわかると、今度は、露骨に「勅旨。国家来年必有海東之政。汝等倭客不得東歸。」と称して捕えてしまふ。「遂逗^二西京^一。幽^二置別処^一。閉^レ戸防禁。不^レ許^二東^一西^一。困苦^レ経^レ年^一、開戦に際し敵国の親善使節を捕虜として幽置するに外ならぬ待遇を、事実のまま記事化し、行間に潜む憤りを同国人の読者には伝え得る表現である。しかも韓智興、足島らへの怨は「徹^二于天之神^一」って「時人称曰。大倭ノ天報之近。」と結ぶ短簡の文の激しさは、その怒りが智興らに対してのみではなく、智興らの讒言をこれ幸と採りあげて調査もせず^{註(2)}に流刑に処しようとした唐朝の官憲に迄向うものである。此の表現力は、後年の行歴記、参天台五台山記に優るとも劣るものではない。しかも仏徒の日記紀行類にみられぬ政治家的視野の広さと含みとをもっている。十分な配慮の下に排列された辞句は、一見単純素朴な記述にすぎないものの如くである。しかも鋭敏な読者は読了と共に筆者の意図する重要深刻な判断を誤りなく受容することが可能である、という、手のこんだものであつて、それは宛然、大鏡作者の表現に通ずる技法をすらみせているのである。表現が政治的条件性によって極度に制約される場合にみられる複雑な日記の様式が、既に素朴な紀行性と共に一作品を形づくっていた、既に七世紀にかかる大人の、

男性の日記が出現していたのである。

註(1) 博徳自身諸藩中倭客最勝としるし、又統紀天平勝宝六年正月に入唐副使大伴宿称古麻呂が帰朝報告中に、大唐の天宝十二載正月に百官諸藩朝賀する際、我を西畔第二吐蕃之下におき、新羅を東畔第一大食國の上においたので抗議した。これがききいれられ、新羅と序列がいかかわつた。

註(2) 智興が既に三千里外に流されたという事、伊吉連博徳の奏上によつて免罪になつた事から調査をすれば、智興の単独犯行であつた事実が判明した筈である。

本文 伊吉連博徳書 (書紀所引)

白雉五年 遣大唐押使高向玄理卒^二於唐^一

伊吉博得言。学問僧惠妙於^レ唐死。知聡於^レ海死。智国於^レ海死。智宗以^二庚寅年^一。付^二新羅船^一。帰。覚勝於^レ唐死。

義通於^レ海死。定恵以^二乙丑年^一。付^二劉德高等船^一。帰。妙位。

法勝。学生氷連老人。高黄金。并十二人。別倭種韓智興。趙

元宝。今年共^二使人^一。帰。

齊明五年秋七月丙子朔戊寅。遣^二小錦下坂合部石布。大仙下津守

連吉祥^一。使^二於唐国^一。仍以^二陸道奥蝦夷男女二人^一。示^二唐

天子^一。

伊吉連博徳書曰。同天皇之世。小錦下坂合部石布連。大山下

津守吉祥連等二船。奉^二使具唐之路^一。以^二己未年七月三

日。発^レ自^二難波三津之浦^一。八月十一日。発^レ自^二筑紫大

津之浦^一。九月十三日。行到^二百濟南畔之島^一。々名母^二分

明^一。以^二二十四日寅時^一。二船相從放^二出大海^一。十五日日

入之時。石布連船横遭^二逆風^一。漂^二到南海之島^一。々名爾

加委。仍為^二島人所滅^一。便東長直阿利麻。坂合部連稻積

このあたりの日記

入之時。石布連船横遭^二逆風^一。漂^二到南海之島^一。々名爾加委。仍為^二島人所滅^一。便東長直阿利麻。坂合部連稻積

等五人。盜乘^二島人之船^一。逃到^二括州^一。々具官人送到^二洛陽之京^一。十六日夜半之時。吉祥連船行到^二越州会稽縣須岸山^一。東北風。々太急。二十三日。行到^二余姚縣^一。所^レ乘大船及諸調度之物留^二着彼処^一。閏十月一日。行到^二越州之底^一。十月十五日。乘^レ馭入京。二十九日。馳到^二東京^一。天子在^二東京^一。三十日。天子相見問說之。「日本国天皇平安以不。」使人謹答。「天地合^レ德自得^二平安^一。」天子問曰。「執事卿等好在以不。」使人謹答。天皇憐重亦得^二好臣^一。「天子問曰。「国内平不。」使人謹答。「治講^二天地^一。萬民無事。」天子問曰。「此等蝦夷国有^二何方^一。」使人謹答。「国有^二東地^一。」天子問曰。「蝦夷幾種。」使人謹答。「類有^二三種^一。遠者名^二都加留^一。次者名^二鹿蝦夷^一。近者名^二熟蝦夷^一。今此熟蝦夷每歲入^二貢本国之朝^一。」天子問曰。「其国有^二五穀^一。」使人謹答。「無^レ之。食^レ肉存活。」天子問曰。「国有^二屋舍^一。」使人謹答。「無^レ之。深山之中止^二住樹本^一。」天子重曰。「朕見^二蝦夷身面之異^一。極理喜性。使人遠來辛苦。退在^二館裏^一。後更相見。」十一月一日。朝有^二冬至之会^一。々日亦觀。所謂諸蕃之中。倭客最勝。後由^二出火之乱^一。棄而不^二亦檢^一。十二月三日。韓智與倫人西漢大麻呂枉讒^二我客^一。々等^二獲罪唐朝^一。已決^二流罪^一。前流^二智興於三千里之外^一。

六年秋七月

伊吉連博德書云。庚申年八月。百濟已平之後。九月十二日。放^二客人国^一。十九日。発^レ自^二西京^一。十月十六日。還到^二東京^一。始得^レ相^二見阿利麻等五人^一。十一月一日。為^二將軍蘇定方等^一所提百濟王以下。太子隆等諸王十三人。大佐平沙宅千福国弁成以下三十七人并五十許人奉^二進朝堂^一。急引^二趨^レ向天子^一。天子恩勅。見前放著。十九日賜^レ勞。二十四日發^レ自^二東京^一。

七年五月丁巳。就羅始遣^二王子阿波伎等^一貢獻。

伊吉連博德書云。辛酉年正月二十五日。還到^二越州^一。四月一日。從^二越州^一上路東歸。七日行到^二檉岸山明^一。以^二八日鷄鳴之時^一。順^二西南風^一。放^二船大海^一。々中迷^レ路。漂蕩辛苦。九日。入^レ夜僅到^二就羅之島^一。便即招^二慰島人^一。王子阿波伎等九人。同載^二客船^一。擬^レ朝^二帝朝^一。五月二十三日。奉^二進朝倉之朝^一。就羅入朝始^二於此時^一。又為^二智興兼人東漢草直足島^一。所讒使人等不^レ蒙^二寵命^一。使人等怨徹^二于天之神^一。震^二死足島^一。時人称曰。大倭天報之近。

難波吉士男人書

齊明紀五年秋七月に一ヶ所引用註記されるのみである。左にその部分を掲げる。

難波吉士男人書曰。向^二大唐^一大使触^レ島覆。副使親觀^二天子^一。奉^レ示^二蝦夷^一。於是蝦夷以^二白鹿皮^一。弓^三。箭^三八

捕虜
待遇
京^一。幽^二置別処^一。閉^レ戸防禁。不^レ許^二東西^一。困苦經^レ來年必有海^二東之政^一。汝等倭客不^レ得^二東歸^一。遂逗^二西

天子
檢問

十。 献^二千天子^一。

博徳書と同一事象を記しながら、男人書は事の概要を極めて事務的に記すのみである。蝦夷の献上物を詳記するが、天子の下問は省略する。博徳書の独自性溢れる観察ならびに巧みな表現力に遠く及ばない。

安斗宿禰智徳日記、調連淡海日記等については省略する。

II

所謂入唐求法僧の巡礼行記の一系列である。入唐僧は、留学であれ、請益であれ、還学であれ、史上その名を留めている者は凡そ別表の通りであるが、そのなかで自記或は他記（弟子、知人による）の記録を有するものの中、関係分を左に年代順に掲げる。因に○印は現存のものである。

書名	巻数	著者名	成立年代
○入唐求法巡礼行記 別名 覚大師巡礼記	四卷	円仁	承和五年—同十四年 838—847
○在唐記 入唐行歴記	同	同	仁寿元—天安二 851—858
○行歴抄 在唐記	一卷	同	貞観元 859
○在唐目錄 (○感夢記)	三十卷	同	同
大唐記	三十卷	同	同
○在唐巡礼記 別名 在唐行歴記、 在唐実録	五卷	同	同

○続在唐巡礼記 在唐雑文 詩集	三卷	同	同	（参六台五台山 記卷二記事）
○頭陀親王 真如親王 慧運	十二卷	同	同	
入唐略記 入唐記	一卷	真如	同	

自舒明天皇 二年(六三〇)
至宇多天皇寛平六年(八九四)

遣唐留学生一覧表

新羅留学生併記

・往復海上又は唐に於いて歿したるもの
(木宮泰彦氏著
日支交通史上巻表による)

人名	入唐便船	入唐年代	習得の学芸宗教	帰朝年代	在唐年数	将来品及雑纂
道 道 道	遺唐大使 吉士長丹の船 (紀)	白雉四 (紀) 653	律宗を学んで帰る (三国仏法伝通縁起)	天武七 (同上) 679	25	四分律抄撰録文を著わす(三国仏法伝通縁起) 文武二年三月僧正に任ぜらる(僧綱補任) 唐において歿す(紀)
惠 惠 弁 覺 惠 道	同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同				
知 僧 惠 弁 覺 惠 道	同 同 同 同 同 同	同 同 同 同 同 同				
道昭(照)	同	同	長安に到り玄奘について法相宗、禪を学ぶ(統紀)	斉明七 661?	78	途中海上に死す(紀) 多くの経論を将来し平城右京禅院におく。 元興寺の東南隅に禅院を建て、住し、後天下を周遊して井を穿ち橋を架す等文化事業に尽す。火葬の始、文武四年栗原にて火葬鎌足ノ子 大和多武峯を開く(貞慧伝)
定惠(貞慧)	同	同	長安に到り恵日道場において神泰に学ぶ(貞慧伝)	天智四 665	12	
安達	同	同				
道観	同	同				

韓島勝婆	筑紫君 薩野馬	道久(道文)	智達	智通	高黄金	法勝	妙位	・義通	・智宗	・智国	・恵妙	・義向	・道福	(坂合部連) 磐積(石積)	義徳	知弁	(氷連老人)	(巨勢臣棗)
			同	新羅船(紀)							同	同	遣唐大使 高田根麻呂ノ 船(紀)	同	同	遣唐大使 吉土長丹ノ 船(紀ノ註)	同	同
				齊明四(紀) 658				白雉四?				同	同	同	同	白雉四(紀ノ註)	同	同
			同	長安に到り玄奘・窺基に ついて無性衆生義をうけ 法相宗を伝ふ(紀)														
同	同	天智十 (紀) 671			同	同	白雉五 (紀ノ註) 654	持統四 (紀) 690							持統四 (紀) 690			
								38							38	1		
			同	法相宗の第二伝(三国仏法伝通縁起)			海に没して死(紀ノ註)	唐にて歿 於海死伊吉博得書							同	天武の朝勅により新字一部四十卷を撰す (紀) 海に没して死す(紀)		

道慈 弁正	八 世 紀	布師首磐 土師宿禰甥 白猪史 宝然 淨願 智蔵 (新羅留学) 觀常 (新羅留学) 雲觀 (新羅留学) 智隆 (新羅留学?) 明聰 (新羅留学?) 觀智 (新羅留学) 山田史御形 (御方) (新羅留学?) 弁通 (新羅留学?) 神叡 (新羅留学?)
遣唐大使 栗田真人の船 (統紀)		新羅船 同
大宝中 (懷風藻) 大宝二 702		天智朝 (懷風藻) 天武十四 (紀) 686 同
唐玄宗に謁し囲碁をよくするを以て愛せらる(統紀) 長安に到り三論法相を学び又善無畏に謁す(三国 仏法伝通縁起)		呉越の間に於て高学尼に ついて三論宗を学ぶ (懷風藻)
		同 天武十 三(紀) 685 同 持統四 (紀) 690 持統朝 (懷風藻)
		持統元 (紀) 687 持統三 689 同 持統朝 712
唐に死す。秦朝元は弁正が唐に於て儲けた子である(懷風藻) 慶雲三年維摩会の講師となる(扶桑略記) 法相宗の第三伝(三国……)		三論宗の第二伝(三国仏法伝通縁起) 扶桑略記慶雲四年十月に新羅留学僧觀智とある。 この人の詩歌は懷風藻・万葉集にみゆ。 帰朝後生徒を教授し又周防守となる(統紀) 和銅五年少僧都となる(統紀) 養老三年その有徳を賞せられ食封五十戸を賜ふ。天平元年少僧都となる(統紀)

理鏡	(阿倍仲磨)	(大和長岡)	(吉備真備)	玄昉	勝暁	行善 (高麗留学)	浄達 (新羅留学)	慈定 (新羅留学?)	摠集 (新羅留学?)	義基 (新羅留学?)	義法 (新羅留学?)	智雄	智鸞
使船? 元正朝の遣唐	使船(統紀) 元正朝の遣唐	同	同	使船(統紀) 元正朝の遣唐								同	同
養老元? 717	養老元 717	同	同	養老五 721		斉明朝?						同	同
		刑名の学を学ぶ(統紀)	長安に到り経史を学ぶ(統紀)	漢陽の智周について法相宗を学ぶ(三国仏法)									
天平(八) (婆羅門僧正碑)	天平(六)	天平(六)	天平六(七)	天平六(七)		養老二(扶桑略記) 718	同	同	同	同	同	慶雲四(統紀)	
19?	17	17	17	17									
中天竺の婆羅門僧正菩提優那を伴ひ帰る(婆羅門僧正碑)	天平勝宝五年孝謙朝の遣唐大使藤原清河と共に帰朝しようとして安南に漂着、再び唐朝に仕う	刑名の学に精しく吉備真備と共に律令二十四条を制す(統紀)	唐礼一百三十卷、太衍曆經一卷、太衍曆立成十二卷、測影鉄尺一枚、銅律管一部、鉄如、方響、写律管声十二条、楽書要録十卷、弓箭等をもたらす(統紀)	経論五千余卷及諸仏像をもたらす(統紀) 法相宗の第四伝(三国仏法：：)	養老四年十二月唐僧道栄と共に転経唱礼を正すことを命ぜられた(統紀)	七代一備嘗ニ難行一とあるから留学は斉明朝か	元亨釈書入ニ新羅一求法とある和銅二年維摩会を修す(扶桑)	統紀養老五年に沙門行善負レ笈遊学既経ニ	法相宗の第三伝(三国……)	同			

戒 明	永 忠	戒 融	(高内弓)	(船連夫子)	行 賀	(膳大丘)	(藤原刷雄)	金 文 学	業 行	玄 法	玄 朗	普 照	・栄 叡
		同	送渤海使板振 鎌束の船 (統紀)	孝謙朝の遣唐 使船?	孝謙朝の遣唐 使船	孝謙朝の遣唐 使船	孝謙朝の遣唐 使船?			同	同	同	聖武朝の遣唐 使船?
宝亀の初(延 暦僧録)	寛亀の初 (元亨釈書) 770	同	天平勝宝字 七(統紀) 763	天平勝宝四?	天平勝宝四 (統紀)	天平勝宝四 (統紀)	同天平勝宝 四(統紀) 752			同	同	同	天平五? 733
			782	唯識・法花の両宗を学ぶ (扶桑略記)	長安に到り国子監に於て 儒学を学ぶ(統紀)					同	同	同	洛陽・長安に学び後揚州 龍興寺の鑑真に随従す (唐大和上東征伝)
				延暦の初 (元亨 紀間)	天平勝宝 六?					同	同	同	天平勝宝 五(唐大 和上東征 伝)
												20 ?	
興寺の靈祐に与えた	法華経の疏を携えて入唐し、これを揚州龍 宝亀三年得清と共に聖徳太子の勝髮経の疏	(後紀)	嵯峨天皇同寺に臨幸の際茶を煮て奉る	律呂施宮図、日月図各二卷、律管二十枚埴 一枚を齎す(元亨釈書)近江梵釈寺に住し	天平勝宝六年十一月外従五位下を授けられ たがうけず(統紀)	月孔子を文宣王と号せんと勅奏してゆるさる	藤原仲曆第六子、父の乱で隠岐に流され、 後赦されて大学頭(統紀)	本名不明、文苑英華に「送」三全文学選二 日本一」と題する沈頌の詩あり。異称日本 伝には全文学は吉備真備であらうといつて いる	唐大和上東征伝に天一平、十五年帰国の途 についたとあるが帰朝したか否か不明			普照と共に鑑真を迎えて帰朝せんとして唐 に病歿天平二十年(同上)	天平宝字三年朝廷に奏し道路に果樹を植う (扶桑略記)

<p>得清 智藏 鑒禪師 楮山人 朴山人 (伊予部家守) (粟田飽田麿) 善議</p>	<p>最澄 (最澄訳語) 義真 (最澄僊従) 丹福成 空海 靈仙 円基 (橘逸勢) 金剛三昧</p>
<p>九世</p>	<p>遣唐副使石川道益の船(叡山大師伝)</p>
<p>世</p>	<p>延暦廿三年804 (同上)</p>
<p>紀</p>	<p>天台山に列り、道邃行満より天台を学び越州の龍興寺に到り順暁より密教を学ぶ(同上)</p>
<p>宝亀九 延暦二十四? 805</p>	<p>長安に到り青龍寺の恵集について密教を学ぶ(上新請求経等目録表)</p>
<p>同</p>	<p>大同元(大師御行状集記)</p>
<p>文苑英華に「贈二日本僧智藏一」と題する劉禹錫の詩あり天智朝に入唐の智藏とは別人本名不明、文苑英華に「贈二日本鑒禪師一」と題する司空図の詩がある 本名は不明、文苑英華に送三楮山人帰二日本一」と題する賈島の詩がある 本名不明、文苑英華に「送三朴山人帰二日本一」と題する釈無可の詩あり 帰朝の後建議して孔子の享坐を定め南面とす。大学助教(国史紀事本末) 後紀に延暦二十四年十月正六位上に叙せられてゐる 道慈の弟子、三論宗の法将といはる。弘仁三年八十四才を以て寂す(後紀)</p>	<p>延暦廿四(同上)</p> <p>2</p> <p>1</p> <p>経疏等二百三十部四百六十卷及仏画仏具等を齎らす。(伝教大師進官録上表。比叡山最澄和尚法門道具等目録)</p> <p>叡山大師伝、伝教大師行状記、扶祭略記等による最澄の訳語として入唐したものであるから彼に随従したものであろう。</p> <p>伝教大師将来台州録、同将来越州録によるに最澄の僊従として入唐した。</p> <p>新訳経等一百四十二部二百四十卷梵字真言讚等四十二部四十四卷、論疏章三十二部一百七十卷…</p>

惠 池	禅 念	安 展	宗 叡	忠 全	賢 真 <small>(真如法親王の 從僧)</small>	<small>・真如法親王 (高丘親王)</small>	豐 智 <small>(智 聡)</small>	大 全 吉 <small>(円珍從僧)</small>	物 忠 宗 <small>(円珍行者)</small>	的 良 <small>(円珍行者)</small>	閑 静 <small>(円珍從僧)</small>	円 珍 <small>(慧 運)</small>	恵 運	恵 萼	仁 濟	順 昌
				3	1	1		24				5	5	3		2 ?

弘	好	三	濟	以	中	老	猷	原	善
拳	真	慧	詮	船	瑾	演	繼	懿	寂

爾來此の系統に、齋然日記四卷、齋然入宋求法巡礼行並瑞像造立記、齋然入唐記六卷

寂照大師來唐記（長保四年1002）參天台五台山記八卷（成尋延久四年1072（1077））等、求法渡唐（宋）僧の日記が陸續とあらわれるのである。

右の作品について検討してゆくと、そこには、既に、明瞭に日記性と紀行性とのわかちがたい結びつきを、何よりも先ず第一に認めなければならない。

III

○ 入唐求法巡礼行記は、円仁が、承和五年 883 六月十三日午

時、船に駕してより、順風無きによって停宿三日、十七日夜半船出をし、志賀嶋東海に五日停宿、廿三日酉時に帆をあげ渡海し、難破し、漸く七月二日小倉船に救いあげられ、楊州海陵県白潮鎮桑田郷東梁豊村に到着、同じく難破した大使以下が、楊州海陵県淮南鎮大江口に到着した事を聞く。その後、先に海中に相別れた録事山代氏益等卅余人と再び相見を得て悲悦竝集。流涙申レ情。爰一衆俱居。漸く落ちつき、小船を雇って国信物を運搬させ、湿捐の官私之物を洗曝したりした。その後、海陵鎮大使劉勉の慰問があり、大使は酒餅を贈った。大暑熱、雷鳴、蚊蝮に悩まされる中、赤痢発生。開元寺僧元昱が訪問し来り、筆言で情を通じあい交歓した。以後、日次を逐って見聞する所を紀行文風に記述して

ゆくのである。

廿一日卯時。大使以下共発去。水路左右富貴家相連。專无^二阻

隙^一。暫行未^レ幾。人家漸疎。云々。塩官船積^レ塩。或三四船。

或四五船。雙結統編。不^レ絶数十里。相隨而行。乍見難^レ記。

其為^二大奇^一。

廿二日 平明。諸船繫^二水牛^一牽去。白鵝白鴨往々多。有^二人

宅^一。相連云々。

廿三日 卯時發行。土人申云。從^二此間^一去^レ県二十里。暫行

不^レ久。水路之側。有^三人養^二水鳥^一。追^二集^一一処。不^レ令^二

外散^一。一処所^レ養數二千有余。如^レ斯類。江曲有^レ之矣。竹

林无^二処不^レ有^一。竹長四丈許為^レ上。指^レ北流行。自^二初乘

船日^一。多指^レ西行。時々或北。或良。或西北。辰時前途見^レ

塔。即問^二土人^一。答云。此是西池寺。其塔是土塔。云々

廿四日 辰時。西池寺講^二起信論^一。座主謙并先後三綱等進

来^二船上^一。慰^二問遠来兩僧^一。筆書通情。彼僧等暫住帰去云々

傍線部分は、行程の途次、次々に展開する物珍しい異国の風物を

記す紀行性ゆたかな記録の部分である。

その後、八月四日、台州国清寺に向う状、妙見菩薩、四王像模

写申請の状に対し、報牒がある。

八日。第四船猶在^二泥上^一。未^レ到^二泊処^一。国信物未^二運

上^一。其舶広棚離脱。浚水殆滿。随^二潮生潮落^一。舶裏洶沈。

不^レ足^レ為^二渡海之器^一。求法僧等。未^レ登^二陸地^一。頭判官

登^レ陸。居^二白水郎舎^一。船中人五人身腫死。大唐迎船十隻許

来。一日一度。運^二国信物^一至。波如^二高山^一。風吹不能^二運

遷^一。辛苦尤甚云々

という悲惨な状態をリアルに記し留める。その後、船師佐伯金成

が痢を患うて死亡し、葬う迄の経過、次いで水手長佐伯全繼が堀

港鎮にあつて死去した事等、辛酸を嘗めた遣唐使臣、留学生、留

学僧、従者等の一行の生活が生々しく記される外、中には、異国

で見聞した事件、開元寺の僧貞順が揚州の禁を犯して破釜を商人

に売却した一件が露顯した事、天子が皇太子を殺害した事件等が

興味をもって記される。又、異国で迎えた、庚申の夜、冬至の

節、殊に正月一日の節、立春(十四日)の翌日十五日夜の燃燈供

養仏の行事等は余程、遊学生活の寂寥を慰めたものらしく、異国

の風俗を記しては故国のそれと比較するのである。当該仏寺逗留

中、交渉のあつた人物、食物、事件等に関して、己が置かれた場

での生活記録であるが、就中、仏徒たる立場上、関心深い設齋等

仏事、儀式の次第は、ことこまかに叙述されるのである。又、

改^二年号^一。改^二開成六年^一為^二会昌元年^一、又勅於^二左右

衛七寺^一、開^二俗講^一左街四処^一、此資聖寺、令^三雲花寺賜

紫大德海岸法師講^二花嚴經^一、保寿寺令^三左衛僧録三教講論賜

紫引駕大德鉢虚法師講^二法花經^一、菩提寺令^三拓福寺内供奉

三教講論大德齊高法師講^二涅槃經^一、景公寺令^三光影法師、請^是按

有^是脱^是 右衛三処、会昌寺令^三内供奉三教講論賜紫引駕起居大

德文淑法師講^二法花經^一、城中俗講此法師為^二第一^一、恵日寺、

崇福寺、講法師未得^二某名^一、又勅開^二講道教^一、左街令

勅新從^二 劔南追^一 ◎道カ 召^二 大清宮内供奉矩令費^一、於^二 玄真觀^一

講^二 南花等經^一、左衛一処未^レ得^二 其名^一、並皆奉勅講、從^二

大和九年^一 以来廢講、今上新開、正月十五日起首、至^二 二月

十五日^一 罷、二月八日金剛界曼荼羅禎画了、又勅令^下 章敬寺

鏡霜法師、於^二 諸寺^一 傳^中 阿彌陀淨土念仏教^上、廿三日起

首、至^二 廿五日^一、於^二 此資聖寺^一 傳^二 念仏教^一、又巡^二 諸

寺^一、每寺三日、每月巡輪不^レ絶、又大莊嚴寺開^二 釈迦牟尼

仏牙供養^一、……………

九月一日勅両街諸寺開^二 俗講^一、七日聞日本僧惠萼弟子三人

到^二 五台山^一、其師主発願、為^レ 求^二 十方僧供^一、却^二 帰本

国^一、留^二 弟子僧二人^一、令^レ 住^レ 台山^一、廿三日大雪下、

一日一夜樹木摧折、十一月一日冬至節、慧星出現、数日之後

漸々長大、官家仰^二 諸寺^一 主転経……………

二年 歳次 壬戌 正月一日、家々立^二 竹杆^一 懸^二 幡子^一、新歳祈長、

令^三 諸寺開^二 俗講^一

と当時、唐土において盛行した俗講について詳しく記している。

流石に高学の彼の目からみれば、彼等化俗法師の俗講などは、そ

の内容を云々する程のものではなかったから、ただ開講の場所、

担当の化俗法師の名、本題とする經典名をあげれば、事足りたの

であろう。ただ文激法師が、城中俗講の第一人者である事を記し

とめたのは興味ふかい。

赤山院を離れてより行二千三百余里、四十四日歩き続けた難行

の後、五台山に到着、不^レ覚雨^レ涙した。諸寺を遍歴し、帰朝の途

につき、九月十八日鴻臚館に入る迄の紀行、即ち、求道問法、聖

跡訪尋の為に入唐した円仁が、仏寺、師僧を尋ねての行脚であつ

たその日次記録、逗留中の生活記録という一様式が、すでに漢文

芸日記において、九世紀に確立されたのである。これこそは、十

世紀の仮名文日記―土佐日記、庵主―へと流れてゆくところの、

我が紀行的日記文芸の祖なのである。風景、人情を叙した記事、

来訪者、贈答品物等の几帳面な記載、これらはすべて以後の男性

仮名文日記に顕著な性格としてうけつがれて行くのである。

○円珍の入唐行歴記も、巡礼行記に遅れる事十年、殆ど同時

代、即ち九世紀中葉に執筆された。これも巡礼行記と同じく日次

記ではなかったか、と想われる。今残存するのは、その抄本と想

われる行歴抄であるが、これによる限り紀行性よりもむしろ、国

清寺における生活記録に重点が置かれてきている様に見うけられ

る。たとえば、同門の先輩留学僧円載との異国における再会(1)の感

激、それが裏切られ、疑惑を懐く過程が(a)(b)(c)(d)と盛りあがり、

遂に犯尼破戒、物欲の餓鬼となり了った円載の姿を確認して後の

公憤が、(イ)円基といい、更に殺人未遂の(ロ)円載といい、慨歎せざ

るをえない実状を、かなりのスペースをとって、巧みに要領よく

簡潔な名文で綴りなしていくのである。

(1) 十一日食時。日本留学円載。差^二 行者陳宝^一 送^レ 書来到。十

二日： 十三日：

十四日：卯辰之間。上^レ 堂喫^二 小食^一。食後下^レ 堂欲^レ 帰^レ 房。

忽然起心。円載不^レ久合^レ 来。不^レ用^レ 入^レ 房。且彷徨待^二

他来^一。思^レ 已行到^二 南門^一 看望。橋南松門上有^レ 師。騎^レ 馬

来到^二 南頭^一。下^レ 馬下^レ 笠。正是留学円載菩薩也。珍便出^レ

門迎接。橋北相看。礼拝流涙相喜。

(2)

珍(a)雖如レ此。載不二多悦一。顔色黒漆。内情不レ暢。珍却念多々奇々。若本郷人元不二相識一。異国相見。親レ於二骨肉一。況乎旧時同レ寺比レ座。今遇二此間一。似レ无二本情一。多々奇々。(b)相共帰レ院。東道西説。无二香味一。説導我在二唐国一。己經二多年一。総忘二却日本語一云々。初唐。

我在二唐国一。己經二多年一。総忘二却日本語一云々。初唐。

不レ因二王勅一不レ令二人來一。珍曰。太々好々。(c)載曰。有レ人説。珍將二來五千兩金一。珍曰。金有二何限一。十五日齋食。円珍喚將二円載一。到二大師堂前一。從レ袖抽出二勅牒一。過二与円載一。當時珍向レ他說……

愚誠不二別事一。但為三閨梨求二大師教一。擬レ伝二本国一將レ副二先師一。珍更无レ可二隨喜一。將レ此表レ誠者。

當時載捧受頂戴。喜躍无限。礼二謝天台大師一。拜二賀円珍一。從レ此以後。口中吐二出本国言語一。不レ可レ尽レ説。因二此事次一。具知二此人本性未レ改一。歸到二房裏一。更与二土物沙金錦絶一。転益歡喜。因語二次第一。載問曰。丁万年幾。

珍曰。四十九歳。載曰。不レ合二領來一。多日取二厄年一恐路上有レ煩……從レ此已來語語得。或時円珍对レ彼試問二天台義目一。曾无二交接一。兩三度略如レ此。在レ後休去。更不二談話一。

(3)

珍心惆悵。山宗留学因レ何如此。貞元年留学円基。(1)佯称眼疾。便帰二本国一。作二外州具綱維知事一。耻二辱宗徒一。今度載見解已爾。恐辱二徒衆一。都无二利益一。既不レ及二叡

山沙彌童子見解。況於二僧人一。嗚々呼々。載來二山中一。經二十余一。或喚二出丁方一。問二珍身辺多少金一。或喚二小師一。偷問二金数一。又徒衆曰。円載乍見二日本人一。惣作二怨家一。会昌三年本国僧円修惠運來到二此山一。具知二円載

犯尼之事一。僧道詮和上曰。円修道心。多有二材学一。在二禅林寺一。見二円載数出寺一。举レ声大哭。国家与二汝粮食一。徒衆待下。汝学満却二帰本寺一。流中。伝仏法上。何不レ勤業。作二此惡行一。蒼々天々。円載因レ此結レ怨。含レ毒。

円修從二天台一。發去二明州一。己後。載雇二新羅僧一。將二毒藥一。去擬レ致二円修一。修便上レ缸發去多日。事不レ著。後新羅僧趁却來曰。他不レ著。載曰。巨レ耐々々々。和言阿々奈々々々々々

次に、日記における「夢」を問題としてとりあげよう。彼には他に、感夢記の著があるが、行歴抄中（従つて恐らく行歴記の中にも）夢語りが多い事は注目されるところである。此処では、日記の本領たる人間個我的生活に沈潜し、喜怒哀歓、苦悩の表白がなされてきているのを確認する事が出来るのである。求法僧たる個我的特殊事情から、求法行脚、渡海を余儀なくされ、従つて、必然的に紀行性が結びついて来、特殊なる場にある個我的魂の救済を求めるとは、感夢の表白をも混在させて来たのである。後

続日記、平安女流日記の特性の一、たとえば、更級日記（孝標女

1058
1060）における仏教的夢語り、たとえば

①…さすがに命は憂きにも絶えずながらふめれどのちの世も思ふ
にかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに頼むこと一つぞ
ありける天喜三年十月十三日の夜の夢にゐたる所の屋のつま
の庭に阿彌陀仏たち給へりさだかには見え給はず霧ひとへ隔
たれるやうに透きて見え給（ふ）をせめて絶え間に見たてま
つれば蓮花の座の土をあがりたる高さ三四尺仏の御丈六尺ば
かりにて金色に光り輝き給（ひ）て御手かたつかたをばひろげ
たるやうにいま片つかたには印をつくり給（ひ）たるを異人
の目には見つけ奉らず我一人見たてまつるにさすがにいみじ
くけ恐ろしければ籃のもと近く寄りても見え奉らねば仏さは
この度は帰りて後に迎へに来むとのたまふ声わが耳一つに聞
えて人はえ聞きつけずと見るにうち驚きたれば十四日也この
夢ばかりぞ後の頼みとしける。

②…山のへといふ所に宿りていと苦しけれど経少し読み奉り
てうちやすみたる夢にいみしくやむことなく清らなる女のお
はするにまいりたれば風いみしう吹く見つけてうち笑みてな
にしにおはしつるそと問ひ給へはいかてかはまいらさらむと
申せは「そこは内にこそあらむとすれ博士の命婦をこそよく

初瀬
かたらはめ」とのたまふと思（ひ）てうれしく頼もしくていよ
いよ念したてまつりて初瀬河なとうちすきてその夜御寺に詣
てつきぬはらへなとして上る三日さふらひてあか月まかてむ
とうちねふりたる夜より御堂の方よりすは稲荷より賜はるし
るしの杉よとて物を投げ出でるやうにするにうちおどろきた

れば夢なりけり

③…石山にまいる…暮かかる程に詣てつきてゆやにおりて御堂に
のぼるに人声もせず嵐おそろしうおぼえてをこなひをしてう
ちまとろみたる夢に中堂より御香賜はりぬとくかしこへ告げ
よといふ人あるにうち驚きたれば夢なりけりと思ふによきこ
とならむかしと思ひておこないあかす…

④…ひじりなどすら前の世のこと夢に見るはいとかたかなるを…
…夢に見るやう清水の礼堂にゐたれば別当とおほしき人いて
きてそこは前の生にこの御寺の僧にてなむありし仏師にて仏
をいとおほくつくりたてまつりし功德によりてありしすさう
まさりて人と生れたるなりこの御堂の東におはする丈六の仏
はその造りたりし也箔ををしさしてなくなりしそとあな
いみしきはあれに箔をし奉らむといへはなくなりししかは異
人箔をし奉りて異人供養もしてしと見て後清水にねむころに
まいりつかうまつらましかは前の世にその御寺の仏念し申し
けむ力にをのつからうもやあらましいといふかひなく詣て
つかうまつることもなくてやみにき

⑤…わづかに清水にゐてもりたりそれにも例の癖はまことしか
べい事も思ひ申されず…うちまどろみりたるに御帳の方
のいぬふせぎの内にあおきをり物の衣をきて…僧の別当と
おほしきがよりきて行くさきのおはれならむしらすさもよ
しなし事をのみとうちむつかりてみ帳の中に入りぬと見ても
うちおどろきてもかくなむ見えつるとも語らず心にも思ひと
ぐめでまかてぬ

⑥…母一尺の鏡を鍔させてゐてまゐらぬかはりにとて、僧をい
だしたてて初瀬に詣でさすめり三日さふらひてこの人のあ

べからむさま夢に見せ給へなといひて詣てさすめりその程は
 精進せさすこの僧かへりて夢をえ見でまかでなむが本意なき
 こといかか帰りても申すべきといみじう額つきをこなひて寝
 たりしかば御帳の方よりいみじう気高う清けにおはする女の
 うるわしくさうぞぎ給へるが奉りし鏡をひきさげて……この
 鏡をこなたに写れる影をみよこれみればあはれに悲しきぞと
 てさめく／＼となき給ふをみればふしまるびなき歎きたる影う
 つれりこの影をみればいみじう悲しな。これみよとていま片
 つ方に写れる影をみせ給へば御簾ともあをやかに木長をし出
 てたる下よりいろ／＼の衣こぼれ出で梅桜咲きたるに鶯木伝
 ひなきたるをみせてこれみるはうれしなとの給ふとなむみえ
 しと語るなり……

において、④は、夫に死別し、年老い、「人々はみな外にすみ
 あかれて古里にひとりいみじう心細く悲しくてながめあかしわ
 ひ」ていた孝標女の「月もいででやみにくれたるをばすて」と観
 ずる孤独な魂の救い、即ち、ながめ侘びあかしかねる今生の果
 に、来世が暗黒の深淵としてではなく、丈六の金色に光り輝やく
 仏に來迎引攝されて九品蓮台に往生する事の確約をもって待つて
 いるという。その行末の頼みとなったのである。

⑤⑥は、作者の不信心によって霧消してしまったと後日衷心
 後悔する仏教的靈夢である。

⑦は不信心な作者の生活態度による不幸な人生行路を予約す
 る不吉な靈夢、Fは信心によつて未だ幸運を掴みうる可能性もあ
 った事を意味する靈夢であった。しかし、作者はBCDEFを例
 の文学熱にかされてうかうかと歯牙にもかかず、信仰によつて
 不幸の道を回避し、幸運の路をとりえたにもかかわらず、遂に若

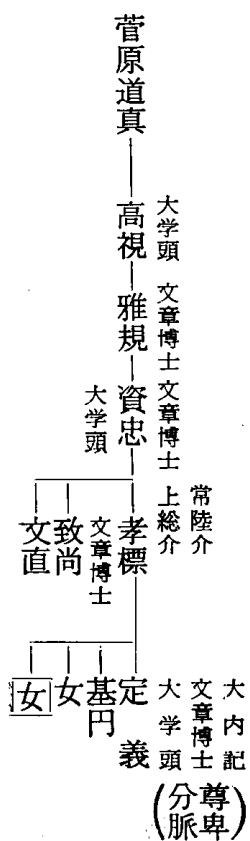
き日々を無信心に終つたため、

昔よりよしなき物語歌のことをのみ心にしめて夜昼思(ひ)
 てをこなひをせましかばいとかゝる夢の世をば見ずもやあら
 まし初瀬にて前のたび稻荷より賜ふしるしの杉よとて投げい
 でられしを出でしまゝにに稻荷に詣でたらましかばかゝらず
 やあらまし……

と歎き、夫の急死に直面して

初瀬に鏡たてまつりしにふしまるび泣きたる影のみえけむは
 これにこそはありけれ

と信じこんでしまつているのである。つまり、ほそく／＼と綴ら
 れ訴えられた孝標女の生とは、文学に憧れ、現実に躓き、若き日
 の宗教、靈夢への無関心に切々たる臍をかむ後悔、とど仏道に帰
 依し、來迎を確信することによつて孤独なる自我が漸くにして救
 済されるにいたつた、ある生真面目な魂の表白であるが、そこに
 読者は、孝標女の生活記録たる日記における感夢の、意外な重さ
 に気づくのである。換言すれば、九世紀の行歴抄、(恐らく行歴
 記にも)が生真面目に形成した感夢の日記はそのまゝに十一世紀
 の人生行路に行きくれた孤独にして生真面目な一人の日記の中
 にもうけつがれていったのである。それは何故であらうかと、当
 然考えなくてはならないところである。その解答は以下随所に述
 べてみようと思う。



○ 頭陀親王入唐略記に関する限りでは真如が客死したため入唐迄の記事に比し、唐及び西天竺に向つてからのそれは甚だ乏しい。異色ある描写としては、本国出発に際して衆僧に惜まれる条であるが、これ亦彼の客死に帰因するものであろう、これとても日記紀行のうちに入るべきものである。

此の系列にある後統日記の中、代表的なる作品、成尋阿闍梨の参天台五台山記について考えてみよう。参天台五台山記は、延久四年、1072²三月十五日、肥前国松浦郡壁島から、唐人船に乗船して以来、日を逐うて、旅行中見聞する風物、世態、人情を敘述する。日日の丹念な日記であり、又、備忘録、金銭出納簿でもあった。

(符号⑥は38頁参照以下同)

廿六日、轎人各与^二廿四文錢^一了

廿三日、参^二小郷衙^一見^二転運使牒^一。錢二百貫可^レ充^二日本僧上京盤纏^一。沿路州軍鎮厚致^二勞問^一旨也。退出了。已

⑥ 時向^二陳敷齋所^一種々珍膳不^レ可^二數尽^一。錢一貫。惟觀善

久長明各百文。午時出^二解院^一。

廿四日卯時出^レ宿。未時到^二着国清寺十方教院^一。預已了。

雇^二州轎担二人^一。各与^二五百文錢^一。寺人力小馬。与^二錢二百卅文^一了云々。

熙寧五年九月廿一日に

法華感應伝一帖、慈氏并一帖、道場五方礼一帖、白衣觀音礼一帖、

を賜った等々。

又、熙寧五年十月廿五日

未時撰^二出大日經義釈廿卷、金剛頂經疏七卷、蘇悉地經疏七

卷、最勝王經文句十卷、法花論記十卷、安養集十卷、以上六

十四卷^一

将向^二三藏許^一借預已了。

と、実に、克明に写経、写像、經典購入の次第、費用等が記入されているのである。この几帳面且丹念な記入は成尋にあつて殊に著しくなった傾向である。

異国風俗に興味をもつて、たとえば

熙寧五年九月十五日天晴。卯二点開^二水門扉^一。入^レ県見^二

⑧ 死人葬^一。船人人皆以^レ白埋^二裏頭^一。女人三人打^レ胸啼泣^二

至^二県官舎前^一。止^レ船云々

と、その故国とはことなつた風俗を写す事にしばし興味を感じているのである。殊に求法の仏寺遍歴である為、延久四年七月廿九日智者大師の「舍利日記」をみ、赤城寺に到つて、智者大師仏前入滅の大殿に参つては、「感涙先下」、文瑤大師の齋所において、「日記、自筆文書」を拝見、後又先輩留学の奮然、寂照の来唐日記をも披見しえたと、深い感激をもつて記し留めている。仏徒間に丹念な日記の行われていた事をするのである。

殊に特色ある記述を拾えば左の如きものである。熙寧六年三月二日、正二月無^レ雨、五穀可^レ絶といふので祈雨の法を修すべしとの宣旨を蒙り、僧二十二人を請い、後苑瑤津亭道場において法華法を修した。皇帝、皇后、皇太后、太皇太后以下臨御し盛儀である。彼は「一^ニ、後五百歳一乘流布時。頭^二法華勝利^一彌令^レ信^二一乘^一。二^ニ、為^レ報^二皇帝広恩^一。必欲^レ頭^二法験^一。三^ニ、八前々大師等從^二日本^一来給。未^レ有^二如^レ此事^一。小僧始有^二此事^一。為^二本國^一無^レ験大耻辱也。依^レ此事^二致誠修行^一。三日之内欲^レ

感^二大雨^一。」

と意を決してとりかかる。他方、皇帝の期待があまりにも大である。雨はなかくふりそうもない。

皇帝頻^レ勞問。阿天彌晴。更無^二雨氣^一。申時皇帝以^二行事大保^一問云。若有^二夢相^一可^レ奏也者。答申云。今朝後夜時。護摩間如^レ夢人告云。四金剛隱^二日月光^一。三日之内必可^レ下^レ雨云々」

② 四日^丁天晴。後夜時後中心思^レ之。今月己及^二三日^一。而未^レ晴○^二雨氣^一。本尊諸尊可^二助成給^一。辰時散念誦間眠入之。如^二陵王^一裝束人一人。又如^二納蘇利^一裝束人共馳^二上天^一了。覺畢思^レ之。赤龍青龍上^レ天也。……日中切々祈申了。未時俄以天醫大雨下。雷電頻鳴。雨足彌大。一時之間大降^二甚雨^一……五日雨下。從^レ夜至^二辰時^一大下。……六日雨下……」

皇帝に謁見を許され、朝野を感激せしめたが、行事張大保が「日本国亦有^下如^二閨梨^一祈雨得^二感応^一人上^否。」と尋ねると、彼は昂然として言い放った。

「多々也。就中真言宗祖師弘法大師於^二唐朝^一從^二青龍寺惠果和尚^一伝^二受請雨經法^一。歸^二本朝^一後。依^二官家請^一於^二神泉苑^一修^二請雨經^一。……」

「勝^レ自^二成尋^一人数十人。等輩人数十人。至^レ于^二成尋^一者日本國无智无行啞羊僧也。依^レ有^下巡^二礼天台五台^一本意^上深所^二参来^一也」

と大見栄をきいたので、大保が

「閨梨所^レ言願以不^レ信。唐朝近来祈雨。大郷五十二日雨下。中天惠遠、惠寂、去年祈^レ雨至^二第七日^一雨下。未^四曾聞^三三日感^二大雨^一」

と感心する等、雨乞の条はスリルにみち、日本人意識を織りこみ、感激を巧にもりあげる事件構成がすぐれ、全体にわたって真に迫る気魄が感ぜられる名文である。又

六年三月廿日

拜^二見新訳仏説一切仏撰相応大教王經聖觀自在念誦儀軌一卷^一。法賢訳。同訳訳法天施護等。文云。境内亢旱。当^下於^二彼処^一一^レ扱地^レ尽^中龍池^上。即於^二池前^一心念^二龍名^一。以^二白芥子及塩^一作^二護摩^一。即降^二大雨^一。一境豊稔云々。今

④ 問經一卷。嗟鞮曩法天子受^二三歸獲免惡道經^一一卷。息淨因緣經。淨意憂婆塞經一卷。初分説經二卷。上下説^二三迦葉身子目連得道^一也。毘婆尸仏二卷。上下見了。皆法天施護天息等訳也。護国尊者所問經四卷見了。无量寿莊嚴經三卷。雙觀經同本異訳也。如幻三摩地无量印法門經三卷見了。觀音勢至本縁授記説^レ之。慈氏院老和尚請来仏手骨長三寸、大方一寸、仏牙一、各入^二七寶宮^一。重々裹^レ之。諸人当^レ頂。各伏^レ地拜。

右の如く、旅行の目的たる求法にかかわるもの、未見の経を披見し、その要点を記しとめ(傍点の部分)、写経し、仏の遺物を礼拝し、仏会に参会し、その莊嚴を讚え、誦誦の經典名を記し、聖賢の僧に会見、交遊の記録はもとより本記の大部分を占めるもの

である。殊に将来仏典の経緯については詳述することやぶさかない。これに附随した一異色は、出納にもかかわりがあるが、饗応——と名付けられぬ位のもの迄——

「二八僧老俗同来。令喫茶了。」

⑤ 「廿日 天晴。齋時三藏送珍羹菜五種」

⑥ 「廿一日 次齋四人同喫。尽善窮美」

「廿五日 齋時照大師送汁一坏、菜二坏。」

と馳走したり、馳走をされた記事を、殆どのこる所なく記しおいたものの如くである。ことに馳走に接した際、椀膳の数、種類を讚える事しばしばであるのは、異郷にあつて簡素な生活を送る身の、素朴に感激しやすかつた環境に基づくものであろうが、これは旅行中というほほ同様な環境にあつた紀行では、土佐日記のおくりもの、あるじまうけの詳細な記述に相通ずる性格である。出納と備忘とを兼備した実用的意義をもつたものである。

⑤ 六年四月十三日丙戌天晴。齋時照大師手自捧盤汁坏菜一坏

⑥ 持来。待新印經一間、以船人一運渡法門雜具等。三

藏并諸大師頻来旁問。未時新經来与。兩箇各敷錦覆錦。

八人担来。官人四人。行者二人。印經院職掌共来。其文

状云。顯聖寺印經院近准。伝法院印新經賜与。日本国成

尋。内除法苑珠林一百卷。日本国僧称本国已有。

更不消印造。外買印造肆伯老拾参卷冊。遂勒本院

④ 造經行人後延之計料。到令使工料備子具状。開坐申。伝

法院使蒙指揮。依数支給。下院造作。今抛經行後

延之状。其上件經已於今月十三日。竝已依数印造。經裏

具如後。杜字号至穀字号。共参拾字号。計二百七十八

卷。蓮花心輪廻文偈頌一部二十五卷。秘藏詮一部三十卷。道

遙詠一部一十一卷。縁識一部五卷。景德伝燈録一部三十三

卷。胎藏教三冊。天竺字源七冊。天聖広徳録三十卷。右具

如前。其上件已造了。新經共四百十三卷冊本院已隨状

差人將擊赴院送納去訖。謹具状申伝法院。伏乞指

揮。謹録状上。牒件状如前。謹牒。熙寧六年四月十三

日

三藏来坐。共依字号計卷軸預納了。官人等祿錢一人三

百文。次一人二百文。次四人各一百文。担夫八人各五十文。

各皆称不足。由。注文字示云。大宋皇帝賜日本齋然一大

藏經六千余卷。使者人力更無錢祿。其日幾記被召納

了。今始分錢多小在人心。承諾還了。即聖秀通事騎

馬向船。申時乘船了。担兵士七人。雇夫一人。各二度往還

運物。与實錢六十文。馬二疋省分六十文了。

十八日卯辛天晴。卯時出船。西時過二百里。至宿州其宅鎮

宿止船了。七時法了。經三。今嵩大師清書送日本新經日

録了。最妙也。杏多々買来。似梅形……

十九日……成尋真影入目錄。送日本。伝法院文惠大師

作讚加写。日本国善惠大師写真讚。訊藏文惠大師智普述。

粟粹日天。為積之賢。分燈智者。接踵齋然。

皇帝響応不異。觀国之光。蒙帝之沢。聿邁良工。遽

伝高格。慈相克肖。乾城妄瞻。滄海万里。秋空一蟾。

還寄^二歸舸^一。衆仰无^レ厭。

熙寧癸丑孟夏五日詔館西齋書

師勤^二卿此讚^一寓^二之卿中^一。

以^二照大師^一令^レ書也。今聊目錄記^二由諸^一云。「年余^二文

旬。且暮難期。滄海波万里。去留無^レ定。故凶^二真影^一。

送^二一室人^一。若聞^レ往生極樂^一之日。披^二此真影^一。念^二

彌陀号^一。廻^二向西方^一矣。」記^二此由^一間。落淚難^レ抑。

今日過^二二百卅里^一。至^二宿州障阜^一宿。七時法了。經四。：

廿日 以下略す。

六月十二日^{申甲}天晴。卯時陳詠來。相^下定新訳経仏像等。

買^レ船可^中預送^上并賜^レ預大宗皇帝志^二送日本^一御筆文書至^レ

于^二物実^一者入^二孫吉船^一了。五人相共今日乘^二孫吉船^一渡了。

善恵大師賜紫成尋記

右に掲げたものは現在する成尋の参天台五台山記八巻の一部である。巻四熙寧五年十月十四日の条に、齋然日記四巻、覚大師巡礼記三巻を長安の宮廷に献上したが、円仁の覚大師巡礼記第四巻は「会昌天子惡事」の記述あるによって隱藏して進献しなかつた、という。又熙寧五年十二月九日梵才三藏の房において「齋然法橋」ならびに「寂照大師」の「来唐日記」をみ、即ち「借り取」つたと記している。齋然日記は宋朝に献上した一部の外にもとより一部所持していたであろうが、「寂照来唐日記」は或は所持せず、「借取」つて披見し、書写したものであろうか。更に齋然及び寂照来朝について詳しい記事をもつ「揚文公談苑」を「書き取」つたとあるが、その一部を日記中に掲げている。それ程先

輩留学を敬慕し、その来唐日記を大切に取り扱っているのである。成尋日記が先輩留学の日記の流れをくむことけだし自然の勢であらう。

V

先ずもって、渡唐僧の日記は、所謂日記本来の性格、即ち①日々の丹念な生活記録、を基盤にもつものであった。②その中には、事件らしいものも、簡潔ながら相当の構成力をもつてまとめられ、巧におさめこまれていたのである。更に、求法入唐の信徒のそれである為、生活記録の内容の中心は、求道問法にある、つまり、③聖賢の僧にあう事、彼等との交歓、④未見の諸経を披見すること、その要領の記述、⑤国清寺における修行、写経、新訳経の購入にあった。その中、異国での交際、就中、あるじまうけ、即ち食事の饗応より簡単な食膳の贈与にいたる迄、それにかの関心がよせられていたのである。主人の心如何とあるじの態度にまで言及する。⑥更には、金銭出納簿的性格をも具備し、写経、使人の費用、購入諸経の代価はもとより、供応の椀膳の数にいたるまでも詳細にしるしとどめる。それは、⑦更には、仏徒であるという条件性の故に、しばしば夢の生活、感夢のそれが叙せられるものであった事である。⑧次に求法の渡唐は必然的に渡航の難行の記事で始まり、異国の聖跡、名寺巡行に伴う客地の自然、風物世態人情の描写、つまり紀行性が著しく顕著となつたわけである。此の類の先蹤文芸は何かと云えば、法顯伝、大唐西域記、ならびに又難航をへて来朝した鑑真の伝、唐大和上東征伝に外ならないのである。又後続作品としては、所謂僧による求法の

旅行に生み出たれた生活記録、それは紀行でもあったから僧の紀行文芸といういみで、庵主日記をもつものである。更には、他の半面をみなければならぬ。円仁、円珍、奄然、寂照、成尋は外ならぬ漢文芸作家圏にぞくする人々であつて、漢文体による日記

入唐求法巡礼行記

承和五年六月十三日午時。第一第四兩船。諸使駕^ア船。縁^ア無^二順風^一。停宿三箇日十七日。夜半。得^二嵐風^一。帆揺上^レ。臚行。巳時^ア。志賀島東海^一。為^レ无^二信風^一。五箇日停宿矣。廿二日卯時。得^二良風^一。進發。更不^レ覓澳。投^レ夜暗行。廿三日巳時。到^二有救島^一。東北風吹。征留執^レ別。比^レ至^二酉時^一。上^レ帆渡^レ海。東北風吹。入^レ夜暗行。兩船火信相通。廿四日望^二第見四船在^レ前去。与^二第一船^一相去卅里許。遙西方去。大使始畫^二觀音菩薩^一。請益留学法師等。相共誦經誓祈。亥時火信通。其貌如^レ星。至^レ曉不^レ見。雖有^二良異風變^一。而无^二漂遷之驚^一。竹蘆根鳥賊貝等。随^レ瀾而流。下^レ鈎取看。或生或枯。海色淺綠。人感謂近^二陸地^一矣。申時大魚随船遊行。廿七日平鉄為^レ波所^レ衝悉脱落。疲信廻不^レ去。或時西飛二三。又更還居。如^レ期数度。海色白綠。竟夜令^下人登^二桅子^一。見^中山嶋。称^レ不^レ見。廿八日早朝。鷺鳥指^二西北^一。双飛。風猶不^レ變。側^レ帆指坤。

土佐日記

紀行文芸をうちたてたのであつて、漢文芸作家でもあつた紀貫之が、仮名文体による日記紀行文芸を試作した十世紀の土佐日記に、実は直ちに流れてゆくものであつたのである。ここに対比によつてそれをみようと思う。

その年十二月の二十日あまりひとひのいぬのときにかどです云々すむたちよりいでてふねにのるべきところへわたるかれこれしるしらぬおくりす云々。廿二日にいつみのくにまでとたひらかに願たつふぢはらのときさねふなぢなれどむまのはなむけす云々。廿三日やきのやすのり云々。これそたはなしきやうにてむまのはなむけしたるかみがらにやあらんくこのひとのころのつねとしていまはとてみえさなるをころあるものはちすそなきけるこれはものによりてほむるにしもあらず。廿四日講師むまのはなむけしにいてませり云々。廿五日かみのたちよりよひにふみもてきたなりよはれいたりてひとひひとよとかくあそふやうにてあけにけり。廿六日なほかみのたちにてあるしのしりて郎等までにものかつかけたり云々。廿七日大津よりうらとをさしてこきいつ云々。廿八日うらとよりこきいてておほみなとをおふこのあひたにはやくのかみのこ山口のちみね酒よきものとももてきてふねにいたり云々。廿九日おほみなとにたまれりくすしふりはへてとうそ白散さけくはへてもてきたりこ

已時至^二白水^一。其色如^二黄泥^一。人衆感云。若是揚州大江流水。令^下人登^二桅子^一見^上。申云。從^二戌亥會^一。直流^二南方^一。其寬廿余里。望^二見前路^一。水還淺綠。暫行不久云々

四月一日朝衙得^二公驗^一。尚書賜^二給布三端茶陸斤^一。齋時当寺有齋。今日尚書郎君生日。因設^二長命齋^一。

二日 早朝齋判官宅喫^レ粥。便入^レ州奉^レ狀謝^二尚書施物^一。

日本国求法円仁。伏蒙^二尚書仁造^一。賜^二給布參端茶陸斤^一。下情不^レ勝^二感載^一。謹奉^レ狀陳謝。不宜謹狀。

開成五年四月二日 日本国求法僧円仁狀上

尚書喚^レ入^二衛前^一。伝語。所^レ施輕少。不足^レ言。謝^レ勞^二和上来^一。好去。次入^二節度副使張員外院^一。辭別。員外喚^二入^一衛裏。

給^二茶餅食^一。啜^レ茶辭別。員外到^二寺裏^一。赴^二趙德濟請

齋。暮際。幕府判官施^二給糧米二斗。鹽料小豆二斗^一。黄昏。

入^二幕府判官宅^一。謝^レ施^二路糧^一。辭^二辭別判官^一。

三日平明發。幕府判官差^二行官一人^一。送^二過城門^一。幕府從

初相見之時^一。每日有^二恩施^一。慰問不^レ絶。發行之時。差^レ人

送路兼示^二道路^一。今日尚書監軍。諸神廟乞^レ雨。從^二寺裏^一。

過^二州城西北^一。去^レ城十里有^二堯山^一。々上有^二堯王廟^一。

堯王昔遊^二此界^一。行過之處。遂建^二其廟^一矣。相伝云。每^二乞

時。了感^二降雨^一。出^レ城向^レ北行廿里。到^二益都界石羊村陳

家^一食。主人^レ心平。齋後西北行十五里。

ろさしあるにたり 元日云々

二日なほおほみなとにとまれり講師ものさけおこせたり 三日云々 四日かせふけはえいてたすまさつらさけよきものたてまつれりこのかうやうにももてくるひとなほしもえあらでいさけわさせさすものなしにぎはしきやうなれどまくるこちす 五日かせなみやまねばなほおなじところにあり云々 六日云々 七日云々 八日云々 九日のつとめて おほみなとよりなはのとまりをおはんとてこぎいでけりこれかれたがひにくにのさかひのうちはとてみおくりにくるひとあまたがなかにふちはらのときぎね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさならなんみたちよりいでたうびしひよりここかしこにおひくる。このひとくぞこころさしあるひとなりける。このひとくのかきこころさしはこのうみにもおとらざるべし。これよりいまはこぎはなれてゆくこれを見おくらんとてそのひとともはおひきけるかくてこぎゆくまにくうみのほとりとまれるひとともとほくなりぬふねのひとみえずなりぬきしにもいふことあるべしふねにもおもうことあれどかいなし云々

到^二金嶺^一東王家^一。主人心性直好。見^レ客慇懃。望^レ西遙見^二長白山^一。去向^レ西行五里。到^二淄州淄川縣界張趙村^一。入^二趙家^一。主人極貧。無^二飯可^一喫。心裏無惡。齋後向^二西北^一行卅里。到^二長山縣界古縣村鄺家^一宿。主人鍛工。本是沛州人。心平有^二道心^一。五日早寤。西北行十里。到^二長山縣^一。從^レ縣西行十里。到^二張李^一。斷中。主人慇懃。齋後西行十五里。到^二長白山東面^一。日欲^レ申時。於^二仙人台前^一。村史家^一喫^レ茶。問^二醴泉寺^一。主人答。從^二不村^一。望^レ西直行十五里。到^二醴泉寺^一云々。使向^二正西^一入^レ山去。錯^二差路^一行十余里。多有^二差路^一。不知^レ所向。緣^レ夜却^二不村史家^一宿。竟夜狗吠。恐懼不^レ眠。

六日 早朝。主人施^レ粥。又差^二一人^一相送。指^レ路正面。入^レ谷行^二過高嶺^一。向^レ西下^レ坂。方得^レ到^二醴泉寺^一。菓蘭喫^レ茶。向^レ南更行^二二里^一。到^二醴泉寺^一。斷中。齋後巡^二礼寺院^一。礼^二拜誌公和上影^一。在^二瑠璃殿內^一安置。戸柱楷砌。皆用^二碧石^一構作。寶幡奇彩。尽世珍奇。鋪^二列殿裏^一。誌公和上是十一面菩薩之化身。其本緣鐫^二著碑上^一。和上。朱代金

城人十日云々 十一日云々 十二云々 十三日云々 十四日 あか
つきよりあめふればおなじところにとまれり云々 十五日云々
十六日 かぜなみやまねばなほおなじところにとまれり云々
八日 なほかはのぼりになづみてとりかひのみまきといふほと
りにとまる……あるひとあざらかなるものもてきたりよねして
かへりごとすをのこともひそかにいふなり、「いひほしてもつ
つる」とやかうやうのことところ／＼にありけふせちみすれば
いを不用。
十五日 けふくるまゐてきたりふねのむつかしさにふねよりひ
とのいへにうつるこのひとのいへよろこべるやうにてあるじし
たりこのあるじのまたあるじのよきをみるにうたておもほゆい
ろ／＼にかへりごとすいへいのひとのいでいりにくげならず
ややかなり。

九日。こころもとなきにあけぬからふねをひきつつのぼれども
かはのみずなければあざりにのみぞるざる……かくてふねをひ
きのぼるになぎさの院といふところをみつゆく。その院、
むかしをおもひやりてみればおもしろかりけるところなり。し
りへなるをかにはまつのきどもあり。なかのにははむめのは
ななきけり。ここにひと／＼のいはく「これ、むかしなだかう
きこえたところなり。故これたかのみこのおほんとも故あ

也。降^三靈於^二此長白山^一。滅度。其後肉身不^レ知^レ所^レ向。

但作^二影像^一。举^レ国敬重。堂西谷辺。有^二醴泉井^一。向^レ前泉

涌香氣甘味。有^二喫^レ之者^一。除^レ病增^レ寿。爾來名為^二醴泉

寺^一。和上滅後。泉水涸尽。但空井。如今泉井之上。建^二一小

堂^一。更作^二和上影^一。影前堂内。有^二石井^一。深五尺余。今

見無^レ水也。寺之南峯。名為^二龍台^一。独出^二君羊田^一。山地

凶所^レ載。会有^レ龍舞^二其嶺^一。以此奏聞。奉^レ勅。改名^二龍

台寺^一。後因^二泉涌^一。改名^二醴泉寺^一。東西南方。嵩峯連塞。

北方開豁。無^二山阜^一矣。寺舍破落。不^二名浮喫^一。聖跡陸

夷。無^二人修治^一。寺庄園十五所。于^レ今不^レ少。僧途本有^二

百來僧^一。如今隨^レ緣散去。現住^レ寺者。三十向^レ也。典座

僧。引向^二新羅院^一安置。七日早朝。堂頭喫^レ粥便發。典座等

衆僧留。明日当寺大齋。因何早去云々。緣^レ欲^三早到^二台山^一

不^レ住出^二寺門^一。向^レ北行十五里。到^二醴泉寺庄^一。断中。向^二

正西^一行二十里。到^二章丘県^一。從^レ県西行十五里。過^二濟河

渡口^一。時人喚為^二濟口^一。從^レ口西北行半里。王家宿。主人

心平。

八日 早發。正西行廿五里。到^二臨濟県^一。入^二尹家^一。断中。便

發。有^二商人^一。施^二五升米^一。過^レ市正西行三十里。申時。

到^二臨邑県界隻龍村張家^一。晚來雨下。主人心平。

九日朝來雨下。不^レ得^レ發。齋後雨晴便發。正西行十五里。到^二

古県^一。是前臨邑県城廓。頽夷無^二一官舍^一。先代寺舍破滅。

りはりのなりひらの中將の「よのなかにたえてさくらのさかさ
らは春の心はのとけからまし」といふうたよめるところなりけ
り。

廿日……はつかのよのつきいでにけりやまのはもなくてうみの
なかよりぞいでくる。かうやうなるをみてやむかしあべのなか
まるといひけるひとはもろこしにわたりてかへりきけるときに
ふねにのるべきところにてかのくにのひとむまのはなむけしわ
かれをしみてかしこのからうたつくりなどしけるあかずやあり
けんはつかのよのつきいづるまでぞありける。そのつきはうみ
よりぞいでける。これを見てぞなまろのぬし「わがくににか
かるうたをなむかみよるかみもよみたび、いまはかみなかし
ものひともかうやうにわかれをしみよるこびもありかなしびも
あるときにはよむとてよめりけるうた

あをうなばらふりさけみればかすがなるみかさの山にいて
しつきかも

とぞよめりけるかのくにひととききしるまじくおもほえたれども
ことのころををとこもじにさまをかきいだしてこのことば
つたへたるひとにいひしらせければころをやききえたりけん
いとおもひのほかになんめでける……あるひととのよめるうた
……

仏像露坐。還為^二耕疇^一。甚可^二憂歎^一。向^二正西^一行十五里。到^二源河渡口^一。過^レ河行十里。到^二禹城県界鷺塘村里甫

家^一宿。主人有^二道心^一。

(五)46頁

十日 平明發。正西行四十里。未時到^二禹城県^一。県市粟米一斗四五文。粳米一斗百文。小豆一斗十五文。麵七八十文。過^レ

城西行十里。到^二仙公村趙家^一宿。通夜雷電雷雨。至曉雷雨止。

主人無^二道心^一。

承和五年七月廿日卯畢到^二赤岸村^一。問^二土人^一。答云。從^二此間^一行百廿里。有^二如臯鎮^一。暫行有^レ堰。堀開^二堅堰^一。發去。進^レ堰有^二如臯院^一。專知官未^レ詳^二所由^一。船行太遲。仍停^二水牛^一。更編^三三船^一以為^二一番^一。每番分^二水手七人^一。令^二曳舫而去^一。暫行人疲。更亦長統^二繫牛^一曳去。左右失^レ謀。疲上益疲。多人難^レ曳。繫牛疲征。爰人皆云。一牛之力即当^二百人^一矣。比^レ至^二午時^一。水路北岸。楊柳相連。未時到^二如臯卷店^一。暫停。掘溝北岸。店家相連。射手丈部貞名等。從^二大使所^一來云。從^レ此行半里。西頭有^二鎮家^一。大使判官等居^レ此。未^レ向^二県家^一。大使判官等聞^下費^二信物^一來。為^二

十六日 けふのようさつかた……かくて京へいくにしまさか

にてひとあるじしたりかならずしもあるまじきわざなりたち

てゆきしときよりはくるときぞひととはかくありける……

京にいりたちてうれしいへにいたりてかどにいるにつきあかければいとよくありさまみゆきしよりもましていふかひなくぞ

こぼれやぶれたる。いへにあづけたりつるひとのこゝろもあれ

たるなりけりながきこそあれひとついへのやうなればのぞみてあづかれるなり。さるはたよりことにもものもたえずえさせたりこよひかかるとことこわだかにもものもいはずいとはつらく

みゆれどこころざしはせんすとす……

⑦ 十六日、かぜなみやまねばなほおなじところにとまれり……

かぜなみとみにやむべくもあらず……

十一日 あめいさゝかにふりてやみぬかくてさしのぼるにひんがしのかたにやまのよこほれるをみててひとにとへば「やはたのみや」といふこれをきゝてよろこびてひとゝくをがみたてまつる。やまさきのはしみゆ。うれしきことかぎりなし。ここに相応寺のほとりにしばしふねをとめてとかくさだむることあり。このてらのきしのほとりにやなぎおほくあり。あるひとこのやなぎのかげのかはのそこにうつれるをみてよめるうたさぶれなみよするあやをばあをやぎのかげのいとしておるかとぞみる

更向^レ州。令^レ装束^一東船舫^一。又云。今日州使来。始充^二生料^一。
從^レ先導^二新羅国使^一。而與^二本国^一一処。而今年朝貢使稱^二
新羅国使^一。而相勞疎略云々

兩者の共通する性格、即、基本的性格なるものについて考えてみよう。

(一) 日次記

ア——の部分参照

両者ともに、自己の生を、毎日の記録、日々の生活記録という形でもって留めておこうとする態度が基本的な性格となつてゐる。一世の碩学円仁と、和歌界の宗匠的存在であると共に漢文芸作家でもあつた貫之とは、我から俗界に背を向けた僧侶と、藤原氏専権によつて執心をもちながらも政界から締め出された他氏、紀氏であるとの違こそあれ、等しく政治から隔離されたところに位置する漢文芸作家の男性なる事において一致している。漢文を駆使し得た有識の男性は尊卑の差こそあれ、文字をもつて官途につくから、多く、文書、記録に携り、いわば官庁の日記、記録、目録より、奏請文、詔勅ならびに法令の作製を職務としていたわけである。従つて彼等において、漢文日記は手なれたものであり、基本的様式はすでに成立して久しいものであつたわけである。即ち、先ず第一の日次記である事、史官には日々の事実に即した記事を几帳面に記録する事が要求され期待されていたから(ア)の部において、さしたる動静の異動がなくてさえ、記入されるのである。十七日から廿二日にいたる間を空白にする事をせず行記「依

无^二信風^一五箇日停宿矣」と明記せずにはいらぬ几帳面な意識が、男性作家の日記を書く根性の基底にあるのである。土左において廿三日から廿六日に飛ぶ事をせず、「廿四日きのふのおなじところなり、廿五日…ふねいださず」又「廿八日 よもすがらあめやまずけふも」と連日、一行、半行たりとも何か書かねば気が休まらぬのである。

これは女流作家の日記の場合—漢文芸作家圈にぞくするものの子女たる紫式部、孝標女—にも承継されてゆこうとするのであるが、これは彼女らの生が、男性漢文芸作家の生につらなるものを一面にもつていたからである。男性作家にあつても漢文芸作家圈とは異質の生をもつ作家、在原業平、平貞文・等にあつては、この日次性は全くこれを欠くのである。

(二) 紀行

既に玄奘三蔵著すところの大唐西域記は、実に傑れた紀行文芸でもあつた。これが逸早く将来されていた上に、唐大和上東征伝の存在は渡唐僧日記の様式を自ら規制していったといわねばならない。玄奘の天竺行、鑑真の来朝そのものが渡唐僧らのもつて範としあこがれてやまぬものであつたから、いわば渡唐なるものは玄奘天竺行、鑑真来朝の系流につながる生の一行動に外ならない。

渡唐僧究極の目的は、震旦をへて天竺、即ち、教学の地への問法をへて、仏蹟の行脚にあったのであるから。玄奘が辛酸をなめて行脚し、つゞぎに記録した大唐西域行の記録、大唐西域記こそは、凡そ仏徒たる者にとつて、憧憬と崇敬とを集めたところの、リアル（見聞のままである）と神秘（異郷の仏蹟であるから）にみちた世界、対立する両性格をはらむ造形の異郷であったわけである。黄海の波濤をこえて大唐に渡り、五台山に新知識、高僧をもとめ、仏寺遍歴を志した彼らの渡唐記録が紀行性を帯びるのはけだし自然の勢であろう。ところがこれはそのまま王朝「庵主」の熊野紀行に流れてゆくわけである。

世をのがれて心のままにあらむと思ひて世の中にききときく所々おかしきを尋ねて心をやり、かつはたうとき所々拝み奉り我身の罪をもほろぼさむとある人有けり庵主とそいひける神無月の十日はかり熊野へまうてけるに人々諸共になといふものなどいふものも有けれと我心に似たるも無りければたゞ忍ひてとうし独りしてそまうてける

先ず京を發つに際し、石清水八幡宮、つづいて住吉神社に参詣したのであった。

かくて社々にさふらひて祈申やう。「この世はいくはくにもあらず水の泡草の露よりもはかなしさきの世の罪をほろぼして行末の菩提をとらんと思ひ得る心ふかうて世を厭ふこと思ひおこたらずあらんによりてなり願はくは吾春は花を見秋はもみぢを見るときも匂ひにふれ色にめてつる心なく朝の露夕の月をみるとも世間のはかなきことを教へ給へ

世の中をいとひて捨てんのちはたゞ住のえにある

松とたのみむ

という。吹上の浜の景をながめこそすれ、その美景に溺れる事なく「夜たつて」、「盤代の野にね」という巡礼行であったわけである。

……御山に着ぬここかしこ巡りてみればあんしつとも二三百はかりをのか思々にしたるさまざまとおかし親しう知たる人の許にいきたれば蓑をこしにふすまのようにひき懸てはた杭といふものを枕にしてまるねにねたりやゝといへはおとろきてとくいり給へといひていれつおほんあるしせんとてこいしけの大ききなる芋の頭をいり出てやかす……

……さて鐘うては御堂へまいりぬ頭ひきつつみて蓑打きつつここかしこにかすしらすまうて集まりてれいしはてゝまかり出るにあるはそ上の御まへにととまるあり礼堂のなかのはしらイもとに蓑打きつつ忍ひやかに顔引いれつゝあるもありぬかつき陀羅尼よむもありさまざまにききにくゝあらはにそと聞もあり斯てさふらふほとに霜月の御八講になりぬそのありさま常ならずあはれにたふとし……霜月廿日のほとにあすまかてなむとて……

と、熊野においてひたすら道を求める人々とのしめやかにもきびしい生活がある。熊野の条は行歴抄、国清寺における生活を記す彼の雰囲氣に甚だ通うものがある。渡船の風浪、痢疫に、異国の生活に困苦した渡唐僧の生のきびしさ、はげしさは、京都住いの庵主には乏しいが、生活が歌僧らしく美化され、沈潜した求道の心となつてくるわけである。

又、僧の身をかえて在俗地方官吏の位相にたてば、渡唐僧日記は、土佐日記となつてくるのである。

(三) 恋愛の拒否

大唐の文化吸収の為に派遣された留学生・僧は必死の覚悟をもって渡唐し、異国にあつて五経中心の儒教を学び、或は経論探究に明けくれる生活であつたから、異性に全く背をむけた生活、従つてその日記は恋愛の拒否乃至欠除の生活記録である。この伝統は、実はわが漢文芸作家圏の文芸の顕著な特徴の一であるが、それは仮名文男性日記、土佐日記、庵主、以下にも流れてゆくものであつて、女流のそれと異なるところである。女流日記においても、漢文芸作家の子女である紫式部、孝標女にはこの血流が流れてゆく。即ち、式部の道長訪問拒否、孝標女の日記が結婚の明細な記事を書く事、即ち、日記に恋愛期をもつ結婚が文芸として形成されず、専ら漢文芸作家系の女流らしく、人の妻、人の母としての所謂実直生真面目な生を形成している。しぐれの夜、春秋優劣論をした異性へのほのかな慕情も、あくまでも、ほのかなそれにとどまらしめずにはおこなぬ内心の規制があつた。この規制こそは渡唐僧日記の、恋愛、好色をしめ出した生まじめな根性の系流なのであつたのである。

(四) 求道と歌

では、渡唐僧より、土佐日記、庵主に流れる男性日記における主題は何か。そこに形成される有識男性の生が誇とするものは何か。それは、かたや求道であり、かたや歌である。渡唐僧が生死をかけて大陸に求道問法の遍歴を敢てした道への執念は、在俗の貫之においては歌への執心におきかえられているのである。庵主はその両者の合流点にあるというべきであろうか。行歴抄が、仏蹟礼拝に随喜し、知識と交歓し、写経、新経購入の記事に熱中する同じ姿勢で、貫之は盛に作歌してゆくのである。庵主は社々をめぐり罪業の却滅を祈念しつゝ歌をよむのである。

(五) 備忘録乃至物質への関心

一粥の施しをも記しとどめる円仁円珍の巡礼行記、行歴記の備忘録的性格、施物に敏感でありこれを一々記しとどめる僧侶の案外丹念に示す物質への関心は、土佐では、いさゝかあくどく、此方のお返しが「えびで鯛をつる」^{41頁五行}恰好だと歎き、あるじ設けを喜ばぬ計数にたけた老地方官吏の日記となつており、ともに丹念几帳面に記入されている点において、備忘録的性格とともに記入者の計算高さは、物質に恵まれなかつた漢文芸作家男性の、これも亦、欲求不満の生活の連続が、しからしめたものであろう。これ亦、女流日記の欠除するところである。漢文芸作家の子女たる紫式部には、式部日記、源氏物語においてすら、美麗を羨しつづけても品目の羅列をよるこぼす抄筆した。それに対し漢文芸作家男性の手になるうつぼ物語にあつてしばしばみうける仰山な品目の羅列は、彼等の欲求不満にもとづく物質へのあこがれを想わしめるのである。孝標女日記には、その血流をうけて吾身と子女の為に「わがみもみくららの山につみあまる」ほどの富をあらはに願うという素朴な現れ方をしていながら、土佐の如き計数にたけた物質への執心はないのである。和泉式部日記、かげろふ日記にいたつては恋愛に主題があり男性日記と全く対照的である。

平安朝期の文芸界を担った男性作家には、ここでとり扱つた渡唐僧、又既に述べた留学生の流れをくむところの漢文芸作家の系列と、しからざるもの、—その雄を業平とするが、所謂「わかんどおり貴族のすきもの」—との系列がある。女流にも亦生面目な前者とすきものの後者とが現れてくるのであり、以上みてきた渡唐僧日記の性格が漢文芸作家圏の物語の中に如実にみうけられる事もしばしばなのである。

(一九六〇年夏稿) —本学教授—